

八月のイモ畑・・・耳を澄ませば聴こえてくる 病原菌達の語らい

キャスト

●疫病菌 あだ名「エキビョウ」

フルネーム「*Phytophthora infestans*(フィトフトラ インフェスタンス)」

ギリシャ語「植物;phyton」+「破壊者;phthora」+「蔓延;infestans」

感染すると植物体上に遊走子嚢(ユウソウシノウ)を作り、遊走子が水を伝って素早く伝染する

●夏疫病菌 あだ名「ナツエキ」

フルネーム「*Alternaria solani*(アルタナリア ソラニ)」

ラテン語「互生の;alternus」+「ナス科;solanum」

棍棒のような黒い胞子を風で飛ばして拡がる

(エキビョウ)今年ちょっとイモと仲良くしすぎたかな。

(ナツエキ)調子に乗って早くからやり過ぎだよ。枯凋剤撒いたみたいに枯らしちゃってさ、うちの出番がないでしょ。葉は8月まで残しておいてもらわないとさあ... 26℃あたりで元気出るんだけどなあ。

(エキビョウ)6~7月は雨が多くて20℃位と、我らには楽園だったからね。昔からイモが大好きでさ、160年ほど前のこと、我らのご先祖がアイルランドで大暴れして人間の歴史を動かした事があったよ。

(ナツエキ)武勇伝かよ。アイルランドってイギリスの隣のか？

(エキビョウ)そうそう。イモが主食だった当時のアイルランドは、痩せた土地でも作れる「ランパー」って品種がほとんどで、それが疫病に弱かった。1846年にはご先祖が9割のイモに蔓延して、被害は凄惨を極めた。そして飢饉で栄養不足の人間に、チフス、はしか、赤痢なんかの病気が流行った。

(ナツエキ)...こわ。それで「蔓延する植物の破壊者」なんておどろおどろしい名前付けられたんだな。

(エキビョウ)ああ。植物病理学の発端となった罪深き一族さ。そんなアイルランドから人間は新天地を求めて移住した。アメリカへの移民の中には、大統領になったJ・F・ケネディの祖父もいたらしいよ。

(ナツエキ)ほう。

(エキビョウ)でもさ、弱い品種だけの畑なら暴れやすいけど、ジャガイモ原産地のアンデスじゃ、ご先祖も人間の知恵に苦労していたそうだよ。アンデスにはさイモ10~20品種を混ぜて一つの畑で作る伝統があって、感染できても蔓延するのが難しいんだ。イモにも我々に抵抗性のある奴がいて、そんな奴らが色々混じっていると、アイルランドのようにはいかないのさ。それでアンデスは、数千年間飢饉知らず。

(ナツエキ)北海道にはいつから住んでるんだい？

(エキビョウ)北海道で人間に気付かれたのは1900年だったな。最近は疫病発生予測システムとか、治療効果のある薬剤もどんどん出てきて、イモと仲良くするのも難しくなったよ。人間も結構手強いよ。

(ナツエキ)治療剤ってやっぱり怖いかな？

(エキビョウ)感染1日後までに薬剤散布されてしまうと、葉の中で菌糸を伸ばすのが苦しくてさ。病斑を大きくし難いし、病斑に遊走子も作りにくいよ。感



発病後1週間で茎だけになった無防除区



ばれいしょの葉裏に出来た疫病の遊走子のう(遊走子の入った袋:白い綿状に見える)

染2日後散布では大したことないけどね。それより怖いのは、やっぱり感染前に予防剤を散布されてしまうことさ。ランマン、フロンサイド、マンゼブとかね。マンゼブまかれたらナツエキもヤバイでしょう？(ナツエキ)ああ、鏡でもあるように撥ね返されるね。農薬のない時代は気楽だったな。

『雨降れば イモまで届け 遊走子 嗚呼ランマンが ついてなければ』

(エキビョウ、塊茎腐敗に臨む一句)

(2009年9月 岡ちゃん記)

参考文献

- ・山本紀夫「ジャガイモのきた道」 岩波新書(2008年)
- ・「北海道における農作物および観賞植物の病害誌」 (1998年) 北海道立中央農業試験場